



6歳6月6日の手習い

花柳乃鼓 こと 会員 川原奈緒子 (63期)

1 髪をまとめ、着物に袖を通し帯を締める時、背筋がピンとして、心が静まっていくのを感じる。ここからの1時間に気を集中させ、身体の隅々の神経を感じ、内面と外面の双方から自分の動きを見つめる——これが、「私が私であるために、私のために過ごす時間」。

2 「6歳の6月6日に芸事を始めると長続きする」

そんな迷信めいた言葉の引力に導かれ、20数年続けてきた日本舞踊。大学受験や司法試験のために中断することがあったものの、迷信にはわかに真実味を帯びてきた。現在も、少なくとも週に一度は浅草に



所在する稽古場に顔を出している。

普段温厚な吾が師も、稽古となれば赤鬼の如き形相で叱責するため、弟子は皆真っ青である。4度目の成人式を迎えたはずの師であるが、背筋は伸び、叱声は稽古場の外まで轟く。これも、芸の力なのか。自分が師の年齢に至った時、あれほどに声を張れる自信は無い。

3 とかく緩慢な動きで「優雅」を連想する日本舞踊であるが、実態は全く異なる。その動きは各流派によって差があるものの、基本として腰を入れることを要する。「腰を入れる」という表現自体にピンとこないかもしれないが、ゴルフをする人であれば、ドライバーショットの際の体幹をぶれさせない感覚を連想してもらえると近いかと思う。体幹を保ったまま、身体の軸を崩さず、種々折々の動きをこなさなければならないのだ。

まして、舞台上に立つとなれば、自分の身体を保つこと

に加え、総重量10kgを超える衣装とかつらを従えて舞台ライトを浴びることになる。そんな事情から、一つの演目は概して15分程度であることが多いが、この15分を「踊り切る」ためには、最低でも1年近くの稽古期間をかけないといけない。そうでもしなければ、衣装の中でもがき苦しみ、15分を終えることになる。

4 ここまで頑張っ一つ作品を「踊り切った」としても、そこで稽古をやめては、すぐに腕が落ちる。舞台でどんなに素晴らしく踊れたとしても、数週間稽古を休んでしまえば元の黙阿弥で、足腰が一気に動かなくなる。その点に、年齢の差は無い。

日本舞踊が遊芸と言われるのは、経済的な側面だけで無く、それだけの時間をかけなければ舞台にかけられる作品とはならないから、そして、そうやって努力して舞台を成功させられたとしても、そこで稽古を怠ればすぐに腕が落ちてしまうから、と個人的には思っている。



5 一つの舞台を作り上げる時、その途中の稽古は辛くて苦しくてたまらない。しかしながら、舞台が終わった後に振り返ると、その稽古期間は充実した時間であったことを実感する。その充実した達成感を知っているからこそ、私は日本舞踊を一生止めないと思う。私にとって、日本舞踊とは心の栄養剤であり、生活の活力である。